現代フランス語における所有与格について

松　田　孝　江

I．序

与格は，本来動詞とともに用いられ，その動詞の意味を補う。そのうちで，利益・不利益の対象を示すものは，一般に datif d'intérêt（利害の与格）と呼ばれる。この datif d'intérêt から派生したものが datif de possession（所有与格）である。フランス語について，Brunot は，これを complément d'appartenance と名付け，その起源をケルト語に求めている。[1] しかしこれは，フランス語の祖語のラテン語のみならず，ギリシャ語，サンスクリット語にもみられることから，[2] 特定の言語に固有のものではなく，インド・ヨーロッパ語のいくつかに共通した用法といってよいだろう。

Ernout と Thomas は，ラテン語におけるこの datif de possession を次の三つの型に分類している。[3]

1）動詞 esse とともに：est *patri meo* domus.
　その家は私の父のものである。

2）その他の動詞とともに：sese……*Caesari* ad pedes proiecerunt.——カエサル『ガリア戦記』，I，31，2．
　彼らはカエサルの足下に身を投げ出した。

3）名詞とともに：*Philocomasio* amator.——プラウトゥス，『ほら吹き軍人』，1431.
　フィロコマシウスの愛人。

そしてこれらは，程度の差こそあれ，そのままフランス語に引き継がれてきているといってよい。名詞の格変化が消失してしまった現代フランス語では，1）の与格は à＋名詞となり，La maison est à mon père. である。3）にみられる二つの名詞の直接構成は，中世フランス語では与格の役を Cas-Régime が果し，例えば，la nef son seignor（＝la nef de son seigneur, 彼の主人の船）のように使われていた。これは，現代語では，Hôtel-Dieu, Fête-Dieu, bain-Marie, Pont-L'Evéque 等の直接構成の語にその痕跡を留めるにすぎない。また，俗ラテン語時代には，与格の代りに ad＋対格が頻繁に使われ，datif de possession もこれに従う。しかしながら，1）の仏訳である être à qn. がきわめて courant なフランス語であるのに対して，3）の二つの名詞をつなぐ場合は，現代では前置詞 de が一般的であり，ある種の成句—la bête à bon Dieu（てんとう虫），le denier à Dieu（手付金），la vache à Colas（新教徒）など—以外に前置詞 à を用いることは俗用とされている。

2）の esse 以外の動詞とともに用いられる所有与格も，名詞の格変化が薄れていくに従って直接構成の形は姿を消し，前置詞＋名詞となった。ただ，名詞の中でも人称代名詞は，格変化を完全に消失したわけではなかった。そして所有与格は，かっての与格の役割の殆んどを引き受けることになった，人称代名詞の間接補語に受け継がれている。

本稿では，現代フランス語の間接補語にみられるいわゆる所有与格の使われ方，およびその周辺の

問題について検討してみたい。

II. 所有関係を示す間接補語人称代名詞

所有表現について文法書を繙くと，多くの場合，次のような説明が見られる。

「名詞が体の部分を表わし，かつその所属関係が明らかな時には，所有形容詞は用いず，定冠詞を使う。所属関係を明らかにする必要がある時は，一般にこれを間接補語で表わす。」[11]

ここでは問題点を，特にこの説明の後半の，所属関係を明らかにする必要がある場合に限定して，関接補語との関連においてとらえてみたい。付言すると，「体の部分の名詞には所有形容詞を用いず」という件は，これに続く Grevisse の注を待つまでもなく，絶対的な規則ではない。体の部分の名詞に所有形容詞が付加されることもあり，所有の間接補語と所有形容詞は共存しているといってよい。

ここで，所有者を間接補語で示した場合，被所有物の文中の機能はどのようになるか，機能別に従って，その使われ方の実際をみてみよう。

(1) 主語

1) Mousquet—*Les bras m'*en tombent… Mais, naturellement, vous refusez ?— J. Romains, *Knock*, p. 101.

あきれた話です。でも，当然お断りになるんでしょう？

2) Je fis, pour ne pas rougir, un effort énorme, qui me fit rougir davantage ; *la tête me* tournait ; mais je n'étais point tant satisfait de ma place, que consterné à l'idée de mécontenter Pierre Louys.—A. Gide, *Si le grain ne meurt*, pp. 216-217.

私は顔を赤らめまいとして精一杯努力した。そのためますます赤くなった。頭がぼーっとした。けれども私は，自分の席次を喜ぶより先に，ピエール・ルイスががっかりすることに気づいて愕然とした。

3) *Les jambes lui* font mal, il les maudit.—A. Philipe, *Ici, là-bas, ailleurs*, p. 124.

彼の足が痛んだ。彼はいまいましくなった。

4) En se penchant pour reconnaître saint Jean (le seul sans barbe), le Gosse faillit basculer et *le coeur lui* battit longuement.—G. Cesbron, *Les innocents de Paris*, p. 187.

聖ジャン（髭を生していない唯一の人物）を，身をかがめてよく見ようとした時，大将はひっくり返りそうになった。そしてしばらく胸がどきどきしていた。

5) *Les oreilles me* tintent.—*Dictionnaire, Le Petit Robert*, p. 1783.

私の耳はがんがんする。

被所有名詞が主語名詞の場合は，成句化したものが多く，数も限られている。これら少数の成句化した表現を除けば，主語名詞には所有形容詞を用いるのが普通である。

(2) 直接目的補語

1) Elle *lui* embrasse *l'épaule* et se cale la tête dans le creux de cette épaule.—M. Duras, *Hiroshima mon amour*, pp. 37-38.

彼女は彼の肩を抱き，その窪みに頭をもたせかける。

2) Comme prévu, M. Heaume, qui *me* tortue *un bras* et met mes jambes à rude épreuve,

commence à grogner.—H. Bazin, *L'huile sur le feu*, p. 157.

思ったとおり，オムさんは私の片腕をひねって脚を乱暴に蹴り，ぶつぶつ言い始めた。

3) L'allumette enflammée *lui* brûla *les doigts*; il la laissa tomber et se détourna.—Colette, *La lune de pluie*, pp. 158-159.

火のついたマッチが彼の指を焦した。彼はそれを捨てると顔をそむけた。

4) Le Baron sans mot dire, *lui* serra *la main*.—B. Vian, *Trouble dans les Andains*, p. 118.

男爵は無言で彼と握手した。

5) T'as entendu? dit-elle à sa soeur en *lui* pinçant *le bras*.—R. Queneau, *Le dimanche de la vie*, p. 90.

「ねえ，聞いた？」と彼女は姉の腕をつねりながら言った。

6) Et une curieuse douleur *me* serrait *le coeur*.—F. Sagan, *Le garde du coeur*, p. 47.

そしてある奇妙な苦しみが私の心を締め付けた。

7) La voix de Remi mue, ses genoux sont écorchés, il a treize ans, mais maman continue à *lui* laver *les jambes*.—D. Rolin, *Le lit*, p. 130.

ルミは声変りし，膝に擦り傷をつくり，13歳になった。しかし，母親は相変らず彼の足を洗ってやっていた。

8) Puis il *me* lissa *les cheveux*; geste qu'il faisait toujours quand il allait me quitter.—H. Bazin. *L'huile sur le feu*, p. 89.

それから彼は私の髪の毛をなでてくれた。私と別れる時いつもするように。

9) Mais j'ai un petit enfant qui *me* mange *le ventre*. Il veut naître, et il naîtra.—M. Pagnol, *Fanny*, p. 195.

でも，私はお腹に子供を宿しているんです。子供は生まれたがっていますし，生まれてくるでしょうよ。

10) Un goût âcre *lui* tapissait *la bouche*.—J. Cocteau, *Les enfants terribles*, p. 169.

彼は口中がひりひりした。

動詞の意味を補うという与格本来の性質からみると，被所有物が動詞の直接目的補語である構文は動詞との結びつきが緊密で一番解り易い。

代名動詞が，直接目的補語として，体の一部を表わす名詞をとるときも，一般に，その再帰代名詞は，所有の与格と説明されている。

a) Il se lave les mains.

b) Il lave ses mains.

しかしながら，上の例で，a) の se を直ちに所有の与格とするのは果して正しいだろうか。ここでは，代名動詞について詳細に論ずるいとまはない。ただ，seは他動詞を自動詞化し，いわゆる中間態 (medium) を形成するためのものであるといえる。b) に較べ代名動詞の a) においては，動作の対象が主語そのものに限定されるので定冠詞（特に片方を示したいときは，単数不定冠詞）となるのであって，再帰代名詞 se の機能について従来よくなされているような，se が les mains の所有者を示すという説明は，代名動詞の本質を顧みない，皮相的な解釈だと思われるがどうであろうか。

(3) 場所・位置の状況補語

これは，前置詞〔相当句〕＋被所有名詞の形をとる。

1) Un jour que je l'admonestais, elle *me* sauta *au visage*, sans trop de griffes, mais pour le principe et le protocole.—Colette, *Chambre d'hôtel*, p. 15.

ある日，私が彼女を叱ると，彼女は私の顔に飛びかかってきた。でもそれは，爪をそれほど立てていたわけではなく，ひととおりの，形だけのものであった。

2) Le saisissant à deux mains, il exerça un puissant effort et l'anneau *lui* resta dans *la main*. —B. Vian, *Trouble dans les Andains*, p. 142.

それを両手でつかみ，力一杯ひっぱると，輪は彼の手中に落ちた。

3) Le chiffre est trop gros pour *lui* sortir de *la bouche*.—H. Bazin, *L'huile sur le feu*, p. 301.

彼女が口に出すには，余りにも額が大きすぎる。

4) Et les bottes *me* tombèrent *des mains*.—Ibid., p. 226.

すると，長靴は私の手から滑り落ちてしまった。

5) Les larmes *me* vinrent *aux yeux*, mais mes mains cessèrent de trembler comme deux pauvres feuilles.—F. Sagan, *Le garde du coeur*, p. 131.

涙が私の目に浮んだ。しかし，私の手は，まるで二枚の哀れな木の葉のように震えが止んだ。

6) Elle la retira violemment en arrière en *lui* enfonçant ses ongles dans *le cou*.—V. Hugo, *Notre-Dame de Paris*, p. 466.

彼女は，彼女（＝娘）の首に爪を立てて，手荒く後に引いた。

7) Et elle *lui* plaquait sur *les joues* des gros baisers d'adieux de province.—G. Cesbron, *Les innocents de Paris*, p. 220.

彼女は彼の頬に，大げさな田舎風の別れのキスをした。

8) Dans l'allée, avant de rejoindre son équipage, il s'arrêta, *me* mit la main sur *l'épaule*, et fixa sur moi son regard sombre et pensif.—E. Jaloux, *Le pouvoir des choses*, p. 113.

一行に追いつく前に，小径で彼は立ち止まり，私の肩に手を置くと，物思いに沈んだ目で私をじっと見た。

9) Son père *lui* jetait un manteau sur *les épaules*, ils montaient dans un petit buggy qu'elle conduisait elle-même et tous deux retournaient à Mont-Jouvain.—M. Proust, *Du côté de chez Swann*, p. 137.

父親は彼女の肩に外套を投げかけた。彼らは，彼女自らがあやつる二輪馬車に乗ると，二人ともモン・ジュヴァンに帰って行くのだった。

10) Une main s'avance, reprend le melon, *me* l'enfonce jusqu'*aux oreilles*, tandis que la même voix lâche cette phrase ambiguë: 《Tu vois, personne n'y avait pensé.》 —H. Bazin, *L'huile sur le feu*, p. 256.

片手が伸びて山高帽をつかむと，あの同じ声で，意味のはっきりしないことを言いながら，それを私の耳まで深く被せた。「ほらね，こんなこと誰も考えもしなかったんだ。」

11) Il ne *lui* vint pas à *l'idée* que de toute façon Julienne la braillait bien haut, sa rengaine, que toute la rue pouvait en profiter.—Ibid., p. 108.

とにかくジュリエンヌが，それを，彼女のいつものメロディーを，上手に歌えるということ，町内中の人がそれを聞けるということを，彼女は考えもしなかった。

12) Phoebus s'en aperçut, et cette solitude enhardit tellement l'aventureux capitaine qu'il *lui* monta *au cerveau* des idées fort étranges.—V. Hugo, *Notre-Dame de Paris*, p. 330.

フェブスはそれに気付いた。そしてこの孤独が冒険好きの大尉を一層大胆にした結果，彼の脳

裡に妙な考えが浮んだ。

13) Il ne *lui* vint d'ailleurs *aux lèvres* qu'une bravade au lieu d'une injure, mais injure ou bravade, qu'importe ?—G. Bernanos, *Nouvelle histoire de Mouchette*, p. 139.

だが，彼女が口にしたのは，罵りのことばではなくて空威張りだった。罵りだろうと空威張りだろうと，そんなことはどうでもよいではないか？

上例のうち，1)～5) は自動詞，6)～10) は他動詞である。このように所有の間接補語は，自動詞，他動詞を問わず，あらゆる種類の動詞と共に用いられる。11)～13) は非人称構文で，成句的性格が強い。

Ⅲ. 所有の間接補語と所有形容詞

所有者を明らかにする必要がある場合に，間接補語と所有形容詞のどちらを選ぶかは微妙な問題である。詳しく論ずるには，個々の表現についてその表われ方を広く調べてみなければならない。ここでは概略的にその一般的傾向をまとめてみよう。

(1) 間接補語と所有形容詞の交換が可能なもの

被所有名詞が主語の時は，所有形容詞の方が一般的であることは既にみたとおりである。Ⅱの(1)であげた少数の間接補語の例の中では，比較的交換の容易なものとそうでないものがある。Ⅱの4)，5)は，次のような例から，容易に所有形容詞に移行可能なものであることがわかる。

Son coeur battait à coup de hache, *ses oreilles tintaient*, elle ne pensait aucune pensée conforme à ce pas actif.—J. Cocteau, *Les enfants terribles*, p. 138.

彼女の心臓は斧を打つようにどきどきし，耳はがんがんしていた。彼女には，この元気な足どりに相応しい考えは何ひとつ浮ばなかった。

しかしながら，被所有名詞が直接補語および場所の状況補語である場合については，次の(2)で検討するもの以外は，交換可能なものが多い。

例えば，誰かが「私の腕をつかんだ」という場合，次の二様に表現できる。

On m'a pris le bras.

On a pris mon bras.

一方では，

On m'a pris par le bras.

という構文もあり，選択の余地がある。

(2) 常に所有の間接補語を用いるもの

1. 熟語として成熟度が高いもの。

例えば，非人称の il vient à l'esprit は，venir à l'esprit で「脳裡に浮ぶ」という成句であり，l'esprit の所有者が必要な時でも，venir à son esprit とはならず，lui venir à l'esprit となる。venir à l'esprit がひとまとめになって，「脳裡に浮ぶ」という心理現象を表わしているため，この間に所有形容詞が入りこむ余地はなく，間接補語として前に置かれるのである。lui は l'esprit の所有者を示すというよりも，venir à l'esprit が lui に対して生ずると解釈できる。

しかし，次の(3)で扱うように，名詞の自立性を高めるなんらかの要素が加わると，これらの連繋

は崩れ，所有形容詞が現われる。

2. 間接補語が利益・不利益の陰影を帯びているもの。

所有形容詞ではなくて，常に間接補語を用いる表現として， Martinon[1] は次の例を挙げている。

1) Le bourreau *lui* trancha *la tête.*

首切り役人は，彼の首をはねた。

2) On *t'*a cassé *la jambe.*

君は脚を挫かれた。

3) On *leur* a ouvert *les yeux.*

彼らは蒙を開いてもらった。

4) Je *t'*ai fait mal *aux yeux.*

私は君の目を傷つけてしまった。

ここでもう一度， datif de possession（所有与格）は， datif d'intérêt（利害の与格）から派生したものであることを想起しなければならない。間接補語と所有形容詞を交換しても，意味の上で何ら全体に影響がないということは，datif de possession が datif d'intérêt から完全に離れるまでに発達した段階である。そこでの間接補語の機能は，所有関係の明示に限られる。

上の 1)～4) は，動詞の意味に，利害の色彩が濃いために，所有形容詞＋名詞への移行には抵抗があり，それがだんだん固定していったものであろう。それゆえ，datif de possession の発達段階からいうと，これらはまだ，datif d'intérêt に近い位置にあるのである。被所有名詞の占める位置も， 4) の faire mal à qc.＝blesser として考えると，ここでの名詞はすべて，与格にとって一番基本的な，直接目的補語である。

次の例は，所有与格が，いわゆる心性的与格 (datif éthique)[2] へ通ずる効果を併せて果しているものとして興味深い。

Le soir, il reçut des visites. Il se levait, *vous* serrait *les mains* sans pouvoir parler, puis on s'asseyait auprès des autres, qui faisaient devant la cheminée un grand demi cercle. —G. Flaubert, *Madame Bovary*, p. 389.

その夜彼は弔問客を迎えた。彼は立って，話す元気もなく彼らと握手を交した。それから人々は順々に坐わり，暖炉の前には大きな半円形ができた。

ボバリー夫人が急な自殺を遂げた夜，夫のシャルルが弔問客を迎える場面である。Il se levait, leur serrait les mains……とすれば，当り前の datif de possession になってしまう。この vous は conteur が attention を惹くために，lecteurs を突然通夜の visiteurs に見立てたものである。

このように，所有の間接補語が， datif d'intérêt であれ，datif éthique であれ，所有以外の要素，単なる所有形容詞では表わせない要素を帯びてくると，所有形容詞との交換は不可能になるわけである。

(3) 常に所有形容詞を用いるもの

被所有名詞が修飾語を伴う時は，所有形容詞を用いるのが普通である。

1) Elle embrasse *son bras nu.*—M. Duras, *Hiroshima mon amour*, p. 52.

彼女は彼のむきだしの腕に接吻する。

2) Et je lui ai baisé les mains, la poitrine, le cou, et *son visage perlé de sueur.*—D. Rolin, *Le lit*, p. 42.

そして私は，彼の手に，首に，そして玉の汗をかいている彼の顔に接吻した。

3) Ils t'ont coupé les cheveux, *tes beaux chevevx d'ange.*—G. Duhamel, *La nuit de Saint-Jean*, p. 110. [3]

彼らは君の髪の毛を，君の天使のように美しい髪の毛を切った。

Ⅳ. 間接補語と所有形容詞の併用について

現代フランス語では，所有の間接補語は，原則として，被所有名詞が体の一部または，その延長上にあるとみなすことのできる精神機能に関する名詞—l'idée, la mémoire など—に限定されている。そしてこれを，衣類やその他の名詞にまで援用するのは誤用とされる。[1] 従って次のような構文は正用とみなされている。

1) Il *m*'a lavé *mon linge.* [2]

彼は私に，私の下着を洗ってくれた。

2) Tu *m*'as pris *mon livre.* [3]

君は私から，私の本を奪ってしまった。

これらの構文では，所有形容詞 mon の意味を間接補語の me に荷わせることはできず，me は純粋に datif d'intérêt の機能を有する。

しかしながら，被所有名詞が体の部分を表わす名詞となるや否や，間接補語と所有形容詞との併用は歓迎されない。

Bauche によれば，

3) Tu *lui* as fait mal à *son épaule.*

4) Tu *me* tires *mes cheveux.*

5) Il *lui* a marché sur *ses pieds.*

はいずれも langue populaire であって，

6) Tu *lui* as fait mal à *l'épaule.*

7) Tu *me* tires *les cheveux.*

8) Il *lui* a marché sur *les pieds.*

とするのが français correct であるという。[4]

したがって，体の一部を表わす名詞に関する限り，正用では，所有与格と利害の与格は渾然一体とならざるをえない。間接補語＋定（不定）冠詞つき名詞の組合せでは，所有に利害が加わる時には，この与格は，二重の意味を支えることになるのである。

しかし，ここで，体の部分の名詞の所有者を示すに当って，間接補語ではなくて，より直接的な表現である所有形容詞を選んだとしよう。これに更に，利害の間接補語を添えることが起らないだろうか。

次の例をみてみよう。

9) Mathieu cligna des yeux, *sa tête lui* faisait mal.—Sartre, *L'âge de raison*, p. 56.

マテューは目をしばたたかせた。彼は頭が痛かった。

10) *Sa main lui* cuisait un peu, une sèche petite douleur, presque un chatouillement.—Ibid., p. 122.

彼の手は少しひりひりした。軽い微かな痛みで，痒いといってもいい位のものだった。

11) Daniel était assis au soleil et *ses tempes lui* faisaient mal.—Ibid., p. 130.

ダニエルは陽を浴びて坐っていた。彼のこめかみが痛んだ。

12) Le rage le fit trembler ; il n'y voyait plus très clair, et *son crâne lui* faisait mal.—Sartre, *Le sursis*, p. 10.

彼は恐りに震えた。もう何もはっきり見えなかった。頭が痛かった。

13) *Sa jambe lui* faisait mal.—Ibid., p. 11.

足の脚が痛んだ。

14) *Ta tête te* fait toujours mal ?—Sartre, *Les mains sales*, p. 186.

君の頭は相変らず痛むのかね？

15) "*Mon coude me* fait trop mal", gémit-elle. —H. Bazin, *L'huile sur le feu*, p. 263.

「私，肘が痛くて仕方がないわ」と彼女はこぼした。

サルトルは，一般的な，Les yeux me font mal 型の構文とともに，上の例のような，所有形容詞と間接補語とを併用した，いわゆる langue populaire とされている構文を好んで用いる。これについては，既にみたように，被所有名詞が主語の場合は，特に所有形容詞との結びつきが強いという事実が，文法家たちの誤用論にもかかわらず，この種の併用を生ずる要因として作用するものと思われる。

しかし，こうした誘因が特別ない場合にも，併用した構文はみられる。少し長くなるが，次の Duras の例をみてみよう。

Un jour, un soldat allemand vint à la pharmacie se faire panser sa main brûlée. Nous étions seuls tous deux dans la pharmacie. Je *lui* pansais *sa main* comme on m'avait appris, dans la haine. L'ennemi remercia.

Il revint. Mon père était là et me demanda de m'en occuper.

Je pansais *sa main*, une nouvelle fois en présence de mon père. Je ne levais pas les yeux sur lui, comme on m'avait appris.—M. Duras, *Hiroshima mon amour*, Appendices, p. 145.

ある日，一人のドイツ兵が，火傷した手に包帯をして貰いに薬屋にやって来た。私たち二人以外店には誰もいなかった。私は教えられていたとおり，憎々し気に彼の手に包帯をしてやった。敵はお礼を言った。

彼は再びやってきた。父がいて，私に，みてやるように，と言った。

私は父の前で，もう一度彼の手に包帯をした。私は，言われていたように目を上げなかった。

ここでは，Je lui pansais sa main. と，Je pansais sa main. が前後して使われている。間接補語 lui の有無は，作者 Duras の単なる気紛れで，何の意味も持っていないのだろうか。そうではなくてやはり lui には，「包帯をしてやる」という相手の intérêt へのニュアンスが込められているのではなかろうか。

こうした文法家たちの誤用論と現実とのギャップは，実は，本稿Ⅱの冒頭にあげた Grevisse の引用文にみられる，「体の部分の名詞には，所有形容詞ではなくて，間接補語でその所有者を示す」という règle が，絶対的なものでないことからきている。常に間接補語を要求する構文は，ある程度熟語として成熟したものが多く，これをもって règle と呼ぶのは相応しくない。この原則が徹底していれば，体の部分の名詞に所有形容詞が被せられることはなく，従って併用も起りえないことになる。

しかし，所有形容詞もしくは所有形容詞相当句と併用された間接補語が，datif d'intérêt の意図で使われていると断定することは，datif d'intérêt を除いても正しい構文として成立するだけに難しい。

次にあげるのは，フロベールからの引用である。

1) *Le coeur d'Emma lui* battit un peu lorsque, son cavalier la tenait par le bout des doigts, elle vint se mettre en ligne et attendit le coup d'archet pour partir.—*Madame Bovary*, p. 70.
相手役が彼女の指先を握った時，エンマの心臓は少しどきどきした。彼女は並んで，バイオリンの始めの合図を待った。

2) *Les oreilles du pharmacien lui* tintèrent à croire qu'il allait tomber d'un coup de sang.—Ibid., p. 111.
薬屋は，耳ががんがんした。彼は自分が，今にも卒中で倒れるのではないかと思った。

3) Rodolphe, de temps à autre, se penchait et *lui* prenait *sa main* pour la baiser.—Ibid., p. 197.
ロドルフは，時々身をかがめて彼女の手をとると，接吻した。

これらに共通の lui はどう解釈すべきであろうか。ここでは，特別利害の与格の必然性も感じられない。lui は，今まで述べてきた二種類の構文の混用であり，pléonasme であるとみるべきであろう。

V. 結語

間接補語人称代名詞による所有者の規定という機能は，被所有名詞の種類に制限があるとはいえ，現代フランス語ではかなり広く使われていて，間接補語人称代名詞の重要な役割の一つである。

利害の与格から発達した所有の与格は，それが純粋に所有者の明示の機能のみを果すまでに至った場合には，所有形容詞と同じ働きをすることになる。しかし，多くの場合，動詞の意味を補うという与格本来の機能につながりをもっていて，動詞そのもの，あるいは文全体の構成と関連をもつ。

元来与格は，それが動詞の意味を補うということから生ずる，かなり広い意味領域をもつ。ラテン語の与格は，フランス語では，それぞれの意味・機能に従って前置詞が選ばれ，前置詞＋名詞となってきた。その中で，人称代名詞の間接補語のみが単独で与格を受けついだため，本来多岐に渡っていた与格の機能をそのまま引き継ぐ形になった。所有与格もその一つである。それゆえ，所有与格の考察に当っても，細部については，与格全体，特に近い関係にある利害の与格，心性の与格との関連性を忘れることはできない。

注

I

1) F. Brunot, *La pensée et la langue*, Masson, pp. 149, 393.
2) 高津春繁，『印欧語比較文法』，岩波書店，p. 207.
3) A. Ernout et F. Thomas, *Syntaxe Latine*, Klincksieck, p. 73.

II

1) M. Grevisse, *Le bon usage*, Duculot, p. 354.

III

1) Ph. Martinon, *Comment on parle en français*, Larousse, p. 156.
2) 中平　解，『フランス語学新考』，三省堂，pp. 1–11.
3) M. Grevisse, op. cit., p. 355.

IV

1) H. Bauche, *Le langage populaire*, Payot, p. 99.
2) Le Clédat, *Grammaire raisonnée de la langue française*, Le Soudier, p. 140.
3) Ph. Martinon, op. cit., p. 140, note.

4) H. Bauche, op. cit., p. 99.

引 用 作 品

Bazin, H., *L'huile sur le feu*, Le livre de poche.
Bernanos, G., *Nouvelle histoire de Mouchette*, Le livre de poche.
Cesbron, G., *Les innocents de Paris*, Le livre de poche.
Cocteau, J., *Les enfants terribles*, Le livre de poche.
Colette, *Chambre d'hôtel* suivi de *la lune de pluie*, Le livre de poche.
Duras, M., *Hiroshima mon amour*, Folio, Gallimard.
Flaubert, G., *Madame Bovary*, Le livre de poche.
Gide, A., *Si le grain ne meurt*, Gallimard.
Hugo, V., *Notre-Dame de Paris*, Flammarion.
Jaloux, E., *Le pouvoir des choses*, Editions du milieu du monde.
Pagnol, M., *Fanny*, Le livre de poche.
Philipe, A., *Ici, là-bas, ailleurs*, Gallimard.
Proust, M., *Du côté de chez Swann*, Le livre de poche.
Queneau, R., *Le dimanche de la vie*, Gallimard.
Rolin, D., *Le lit*, Denoël, Folio.
Romains, J., *Knock*, Gallimard.
Sagan, F., *Le garde du coeur*, Le livre de poche.
Sartre, J-P., *L'âge de raison*; *Le sursis*; *Les mains sales*, Le livre de poche.
Vian, B., *Trouble dans les Andains*, Union Générale d'éditions.